

障害者の外出支援の体験学習の試み —学習の教育的効果と課題—

Attempts of the experience learning program of transportation and escorting
service for handicapped people

— Educational effects and challenges by the experience learning program —

齋藤 真木
Maki SAITO

尾台 安子
Yasuko ODAI

合津 千香
Chika GOZU

丸山 順子 赤沢 昌子 福田 明 小坂 みづほ
Junko MARUYAMA Masako AKAZAWA Akira FUKUDA Mizuho KOSAKA

要旨

近年、日本の社会では、移動に障害がある人の外出を支援する動きが高まってきた。介護を学ぶ学生たちは、介護実習などで、障害者や高齢者の外出に同行する機会も増えてきた。しかし、学生たちには、外出支援ひとつをとっていても、利用者の生活や心身の状態を理解し、支援の方法を考え、実施につなげることは難しいようである。そこで、介護福祉学科では、授業の中に今年度初めて障害者の外出支援の体験学習を導入した。

実際に公共交通機関を利用して地域社会に出てみた学生の学びからは、①障害者の心理面や生活の不便さや制限を感じることができ、支援にあたっては障害者の目線でとらえることができた。②自己の介助方法や技術の未熟さを痛感し、さらに技術の向上に努める必要性を自覚した。③車椅子利用者への様々な配慮やサービスの理解を深めることができた。④障害者が社会「参加」することへのさまざまな障壁を理解することができたという、教育的効果が認められた。また、体験学習に同行した教員のふり返りから、科目間連携の整理の必要性や授業展開の課題について考察し、来年度の授業につなげることができた。

【キーワード】 障害者の外出支援 体験学習 介護福祉士養成教育

I. はじめに

介護福祉士養成教育においては、平成20年度に大幅なカリキュラム改正が行われ、養成教育の達成目標も明確にされ、より介護福祉士に必要な学問体系となった。また、カリキュラム構成に学校の独自性を出すことができ、授業内容においても効果的な授業展開を考えることができるようになって3年目を迎えた。しかし、入学してくる学生は、自ら考える力が弱く、生活体験が非常に乏しくなっている。体験を通して、そこから学ぶことができる学習としては、古くから排泄の「おむつ体験」が行なわれているが、「障害者の外出支援」の体験の報告は見られない。そこで今年度から「体験学習」を行い、学生の気づきを振り返らせ、介護支援に生かすことが出来ればと考え、障害者の外出支援体験学習（以下、「体験学習」とする）を導入した。障害者・高齢者の外出支援は、施設内においても行われることが多くなっており、外出支援計画の実施は社会の状況を理解するのに役立ち、「体験学習」をすることにより障害者の立場の理解に役立つと考えた。

障害者・高齢者の外出支援は、サービス利用者のアクティビティ活動としても取り組まれることが多

くなり、利用者の生活にいろどりを添えている。また、介護職としては、利用者の通院や買い物などの日常的な外出や、旅行などの付き添いをする機会も多くなる。一方で「外出」というものは、さまざまな生活行為の連続から成り立つものである。健康状態を整えること、外出の目的を果たすために計画を立てること、必要な持ち物を準備すること、外出にふさわしい装いをする、また、目的地に行くまでに移乗、移動が伴い、外出先で食事やトイレに行くという行為が出てくる。そこで、生活行為の支援の学習の大半が終わっている2年次の前期「移動の生活支援Ⅱ」の科目の中で「体験学習」を実施した。専攻科は後期に実施した。

また、一般的に体験学習は「関心」「知識」「態度」「技術」「評価能力」「参加」といった態度や力をはぐくむといわれている。外出計画を立て主体的に取り組む、原体験を通して興味をもち、問題に気づくことが出来る。そして、知識の必要性や裏付けができたり、「こうすればいい」「こうしていく必要がある」ということの理解が深まる。今回の取り組みをふり返り、学生の学習意欲を高め、主体的な学びができるような授業展開をしていくための示唆を得た

ので報告する。

体験学習ということばの整理をしておく。体験学習とした場合は、一般的に使われている、実際的な活動を通して学習効果を狙った学習形態を意味する。一方的な知識とは異なる環境での体験を通して学習するものを指すことにする。

障害者の外出支援体験学習については、「体験学習」と表現して、言葉の区別をする。

Ⅱ．研究目的と方法

研究目的としては、「体験学習」を導入したことの効果を検証し、次年度の授業展開に生かすために、改善点や課題を探るものとする。

研究方法としては、

- ①「体験学習」を導入したことの効果の検証については、学生の実施後の振り返りとしての自由記述のレポートの内容を複数の教員でカテゴリー化した。分類の視点として、「体験学習」を取り入れ、報告会を持つことにより、主体的に学ぶことができ、障害者の立場に立って考えることができているか、社会のバリアフリーについての理解が深められたか、外出支援時のポイントが理解できたかを探ることにした。
- ②授業展開については、「体験学習」に同行した教員が、実施後、担当グループの様子などについて、あらかじめ提示した項目に対して記述してもらった「教員の振り返り」を基に、改善点を探ることにした。

Ⅲ．倫理的配慮

学生たちにとっての実施後のふり返りの自由記述のレポートについては、無記名でグループごとにまとめたものを使用するため、個人を特定できないものであること、本研究としてのみ使用するものであること、成績にはいっさい関係のないものであることを口頭で説明を行い、協力を依頼する。また、外出支援の実際の写真については学生たちに説明を行い掲載の許可を得ている。

Ⅳ．体験学習の概要と授業展開

1. 「体験学習」の概要

障害者の外出支援の体験学習は前期に2年生が実施した。その取り組みを踏まえて、後期には専攻科福祉専攻（以下、専攻科）で実施している（表1）。授業科目は「移動の生活支援Ⅱ」の中で実施する。従来は車椅子での外出ということで学校周辺の道路を利用していたが、今回は障害者の外出の支援計画を立て、実施し、振り返りを行うという体験学習に取り組んだ。

2年生の「体験学習」実施後、関わった教員の振り返りにより、後期に実施をした専攻科の場合は、更に効果的な学習ができるようにと改善したのが、下線を引いた部分である。

表1 「体験学習」の概要

項目	介護福祉学科2年	専攻科
科目名	移動の生活支援Ⅱ	
体験学習の目的	学生が、障害者役（今回は車椅子利用者）になりきって、またはその介護者役として外出支援計画を立て下見をして、実際に地域社会に出ることから得られる気づきや発見を、報告会を開いて学生全体で共有する。そして、ノーマライゼーションの理念に基づいた支援ができるような考え方を習得する。	
対 象	2年生 61名 4・5名のグループでの学習	専攻科 10名 <u>2～4名のグループでの学習</u>
体験学習実施日時	平成23年7月1日（金）1限～4限	平成23年 <u>10月11日（火）2限～4限</u>
共通の利用者像	障害者支援施設A（松本市笹賀）に入所している。健康状態は安定している。上肢はゆっくりと動かすことはできるが、手先の細かい動きが十分にできない。歩行ができないため、車椅子で移動。支えがあれば、20秒ほど立位保持ができる。	共通の利用者像：歩行ができず、移動には車椅子の介助が必要な人。 <u>詳しい利用者像についてはグループごとに設定する。</u>

体験学習の条件	<ul style="list-style-type: none"> ・ 準備から実施後の報告会までグループ内で役割を決めて行う。 ・ 交通機関を利用する。 ・ 外食を体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>目的地は松本市とその周辺に限定する。</u> ・ 準備から実施後の報告会までグループ内で役割を決めて行う。 ・ <u>自家用車以外の交通機関を利用する。</u> ・ 外食を体験する。
グループで選んだ目的地	松本城（松本市）、シネマライツ（松本市内の映画館）、アイシティ（山形村内のショッピングセンター）、白樺湖（茅野市）、ちひろ美術館（池田町）、かてんばばガーデン（伊那市）	松本市美術館
グループ内の役割分担	利用者役、グループリーダー、記録（写真撮影）、会計	<u>利用者役1名につき、介護者役1名</u>
教員の関わり	学科の教員7名と非常勤講師1名が、グループの学生と事前に打ち合わせをして、当日はグループに同行した。	<u>当日の該当科目担当教員3名が各グループに関わり、当日の写真撮影や事前・事後学習に介入した。</u>

2. 授業展開

(1) 介護福祉学科2年生の場合

2年生の授業の展開は表2のとおりである。「移動の生活支援Ⅱ」の授業全15コマの内、事前学習

として5コマ、体験学習当日に4コマ、事後学習に3コマの計12コマを当てている。この間の授業においては空いている教員の参加を促し、計画案を学科会に提示して、内容の共通理解を図った。

表2 2年生の授業展開

日	授業内容
5/6	車椅子利用者の外出支援の留意点についての講義
5/13	グループ内の役割分担や目的地を決め、外出支援計画立案
5/20	移動方法などを調査・検討して外出支援計画書を作成
5/27	介護ショップの方の指導により、外出時の車椅子の扱いの留意点及び事前点検、利用者役の学生に合わせたフットレストの調節等の学習
5/30～6/21 は介護施設にて実習	
6/24	教員とグループで最終打ち合わせ・準備
7/1	「体験学習」実施
7/8	「体験学習」の振り返り・報告書作成
7/29	「体験学習」の振り返り・ポスター制作
7/30	「体験学習」報告会

(2) 専攻科の場合

専攻科の場合は、2年生の取り組みを踏まえて表3のように展開された。なお、連携をした科目は、時間割との関係で「介護自立支援論」「生活交流演習」である。特に「介護自立支援論」では、介護を必要とする人の尊厳の保持や自立とは何か、介護福

祉士として、生活の観点からどのように自立支援をしていくのかを考えていくために、今回の障害者の外出支援の体験学習と重なる部分があったので、効果的な連携を図ることができた。授業の前半でおこなった「生活の中の自立とはどんなことか」というテーマのラベルワークにおいて、学生の中から、「経

済的、精神的、身体的、社会的、身近生活面の自立」などとともに「移動の自立」ということが上げられた。そして、それらの自立を支援するためには「自己選択、自己決定、自己管理、自己責任、自己実現」などを尊重し、介護を必要とする人に対しては「援助付きの自立」もあり得るということを学んでいた。また、毎年行っている、車椅子利用者による特別講

義「障害者の自立生活」の授業との連動も図ることができた。その中で外出支援の事前学習として、外出の困難さ、街や建造物のバリアフリー、交通機関関係者の理解、一般の人々の視線など、外出支援の視点を学ぶことができ、計画立案の段階で非常に有効であった。

表3 専攻科の授業展開

日	授 業 内 容	連携した科目
9/20	車椅子利用者の外出支援の留意点についての学習・外出支援計画の立案	
9/26～10/1 は介護施設にて実習		
10/3	車椅子利用者（当事者）の方から、外出の際の留意点などのアドバイス	介護自立支援論
10/4	教員とグループで最終打ち合わせ・準備 松本短大入り口バス停まで車椅子を使用して下見・車椅子の道路走行の介護技術や、自動車への移乗方法の確認	介護自立支援論
10/11	「体験学習」実施	介護自立支援論 生活交流演習
10/18	「体験学習」のふり返り・体験から浮かび上がった課題の調査	
10/25	報告書作成 課題の調査	介護自立支援論
11/1	「体験学習」報告会 車椅子利用者（当事者）の方の参加	介護自立支援論

3. まとめの方法

2年生は、「体験学習」の事後学習として次のようなまとめを行った。

「体験学習」当日、帰校後学内にて体験をふり返りながら、利用者役の学生・介護側の学生それぞれに「体験学習」の記録を課した。後日、グループごとに記録や写真をもとに報告会用の資料と、パワーポイントの作成を行い、報告会の準備をした。報告会は、2年生全員と教員が参加する中で各グループの「体験学習」の様子と、そこから得られた気づきや学びを、パワーポイントを使って報告しあい、学

びを共有することができた。また、個別には「体験学習」から学んだ事柄をもとに、車椅子での外出の体験とポイントを紹介するポスターを制作して、気づきが明確化できるようにした。

専攻科の場合も同様に「体験学習」の記録を作成し、それをもとに報告会を行った。加えて、「体験学習」をしたことによって浮かび上がってきた次の5つの「課題」についても、グループごとに調査をして報告をしている（表4）。実際に体験して不便であったり、疑問に感じたりしたことを調査したため、学生が主体的に取り組む姿がみられた。

表4 課題の調査

調 査 課 題	結 果	関 連 科 目
①「バリアフリー新法」について	公共的な建築物などの通路や入り口、トイレの構造などについての法的根拠を調査した。	介護福祉サービス論
②松本市の公共交通機関における車椅子利用の現状	主に JR の乗降介助やエレベーターの設置について調べ、松本駅副駅長への取材から、乗降客の少ない駅では実施・設置されていないことがわかった。	介護福祉サービス論
③松本市で展開される障害者送迎サービスについて	社会福祉協議会やNPOなどが実施している送迎サービスや運転サービスについて調査した。	介護福祉サービス論

④利用者の安全・安楽を考えた車椅子の介護技術	利用者の安全・安楽を考えた車椅子の介護技術の復習をした。	移動の生活支援 I
⑤外出に適した構造の車椅子はあるのか。	様々な、車椅子の種類や構造について調査した。	

V. 「体験学習」からの学び

学生は、車椅子に乗って、或いはその介護者として実際に地域社会に出てみることで様々な体験をし、気づきをしてきており、社会とのつながりの中で学び、考えられていた。「体験学習」後の学生の記録から複数の教員でカテゴリー化を行い、①交通に関する気づき、②建造物に関する気づき、③介護者体験からの学び、④障害者体験からの学びの4つのカテゴリーにまとめられた。

1. 交通に関する気づき

多くの学生が、施設実習などの際に、施設の車で利用者の外出に付き添ったという経験はあるものと思われる。しかし、自分たちが主体で交通機関を利用して車椅子で出かけることは始めてであった。普段何気なく利用している道路や交通機関であるが、車椅子で利用するための方法を知ることができた(写真1、写真2)。また、利用者や介護者としてそれらを利用してみると、改めて気がつくことが多くあった。バリアフリー新法等の施行をもとに都市部を中心に、高齢者や障害者に配慮された部分が増えてきつつある現在ではあるが、配慮が不足している部分や利用者の視点に立って考えられていない部分も目立ち、車椅子利用者にとって屋外を移動し、交通機関を利用することには問題が多いことがわかった(表5)。



写真2 ノンステップバスの車内の様子。座席を立てかけると車椅子専用スペースになる。走行中車椅子が動かないようベルトで固定されている。



写真1 JRの電車に乗るところ。ホームと電車の間にスロープを渡してもらい、安全に乗車することができる。

表5 交通に関すること

場面	車椅子で利用・介助しやすいと感じた部分	利用・介助しやすい理由	車椅子で利用・介助しにくいと感じた部分	利用・介助しにくい理由
道路	凹凸の少ない、平坦な道路 幅の広い歩道がある 交通量が少ない道路	振動が少ない 車道と分離されていて安全 思い通りに走行できる	屋内と比較して、路面には凹凸が多い 砂利道・ウッドチップが敷いてある 市街地の歩道には障害物が多い 市街地の歩道は車道との高低差が大きく、交差点が多い 道幅が狭く、歩道がない 路肩に向かって傾斜がある・路肩に溝がある	振動が大きい タイヤが埋まってしまう まっすぐ進めない 上り下りが多く利用者・介護者の身体的な負担が大きい 自動車が通ると路肩へ寄りなければならない 車椅子を水平に保って進めない
駐車場	障害者用のスペースがある	建物の入り口に近い スペースが広いので乗り降りしやすい	一般の駐車スペース	スペースが狭いのでドアが十分に開かない場合がある
JRの駅	エレベーターがある 駅員による誘導や介助がある 可動式スロープが駅に設置されている 自動券売機がある	駅内の移動がしやすい 安全に移動し、乗り降りができる 安全に電車の乗り降りができる 構造が配慮されている	エレベーターがない 車椅子で利用するには、あらかじめ電話連絡が必要 移動には駅員の誘導と介助が必要 行き先案内板の位置が高い	駅内の移動がしにくい 手配が煩わしい 急な乗車変更がしにくい 到着してから乗車までに時間と人手がかかる 見にくい
普通列車	列車の中の行動は利用者や介護者に任されている 車椅子を進行方向に直角に位置する	自由に行動できる 好きな場所に移動できる 乗り心地が良い	乗車に関する説明や介助がない 車椅子の固定ができない 車椅子用のスペースがない 走行中の車椅子の位置や向きがわからない	乗車中の留意点がわからない 安全面で不安がある 他の乗客に気をを使う 乗り降りに時間がかかる 向きによって乗り心地に差がある
路線バス	リフトバス・ノンステップバスが配備されている リフトバス・ノンステップバスは車椅子乗車への様々な配慮がされている 1週間前の電話連絡により乗車時間に合わせてリフトバス・ノンステップバスの配車が可能 運転手が乗り降りの介助をする	車椅子のまま安全に乗車できる 安全に利用することができる 車椅子のまま希望の乗車時間に乗車できる 安心して任せられる	リフトバス・ノンステップバス以外のバスがある 運転手が車椅子の乗車に慣れていない 1週間前に電話連絡によりリフトバス・ノンステップバスの配車を依頼する ワンマンカーである	乗りたいときに車椅子のまま乗車できない場合がある 乗り降りに時間がかかる 手配が煩わしい・急な乗車変更がしにくい 運転手が1人で乗り降りの介助をするため、時間がかかる
松本バスターミナル			乗車券売り場が地階にあり、乗車場所まではエレベーターがないため、一階へもどり、外を回って乗車場へ移動しなければならない(注)	移動距離が長く乗車に時間がかかる
バス停留所	車道横にバスの停車スペースがある	安全に周囲に気兼ねなく乗車できる	車道横にバスの停車スペースがない	停車中歩行者などが通行できない 後続車が渋滞する
タクシー	乗車・降車の場所の選択が可能 福祉車両がありヘルパー資格を持った乗務員がいる	利用者側の都合が優先される 車椅子のまま安全に乗車できる乗車前後の移動介助を任せられる	公共交通機関と比較して料金が安い	
自家用車	乗車・降車の場所の選択の自由がある 学生及びその家族が所有している 乗車・降車の介助ができる	周囲を気にせず利用できる 運賃が発生しない 介助の工夫ができる	車椅子⇄自動車の移乗を要する 学生及び家族が所有しており、運転者も学生である 車椅子をたたんで収納する必要がある	状況によっては移乗が困難 事故などについての心配がある 車椅子や自動車の破損につながる恐れがある

2. 建造物に関する気づき

「体験学習」で利用した建造物の中には、障害者に対して配慮されているところ（写真3）と、まだ不十分なところとがあった。建物が古いところは不十分さが見られ、公共施設であっても使いにくい部分があった。また、展示物や商品の並べ方の配慮不足（写真4）や、スロープ付近に自転車が止められているなど一般の利用者のモラルの低さなども車椅子利用者が利用しにくい原因にもなっている（表6）。



写真3 ショッピングセンター内を移動中。通路は広く、バリアフリーになっている。



写真4 博物館で展示品を見ている場面。展示物の位置が車椅子利用者にとっては高すぎて見えにくい。

表6 建造物に関する気づき

車椅子の利用者に配慮されている部分	車椅子の利用者に配慮されていない部分
段差がない	出入り口やアプローチ部分に段差がある
エレベーターが設置されている 操作ボタンなどが操作しやすい	エレベーターが設置されていない
障害者用トイレが設置されている	障害者用トイレが設置されていない
通路や出入り口が広く車椅子の動線がゆったり確保されている	通路や出入り口が狭い
自動ドアが設置されている	自動ドアがなく開き戸や引き戸である
商品や展示物の高さが適切である	商品や展示物の設置の高さが高すぎる 商品は上にあるものは手に取ってみることはできない
ショーケースやカウンターなど設備の高さが適切である	設備の高さが車椅子利用者には高すぎる
明るさが確保されている	
	映画鑑賞の障害者スペースは、最前列であるため首が痛くなり苦痛
	試着室は椅子もなく使いづらい
	美術館の展示は大人が立って観る高さにあわせてあり、首が疲れた

	出入り口付近のスロープの手前に柱があった
	スロープ付近に自転車が置いてあった
	スロープの勾配がきつくて車椅子を押すのが大変
	エレベーターの利用者が多いと車椅子では利用しにくい

3. 介護者体験からの学び

介護を学んでいる学生だけに、「体験学習」中、利用者の介護については惜しみなく率先して行動している姿がみられた(写真5)。「利用者の安全・安楽・安心への配慮」や「利用者の気持ちへの配慮」の項目からも、これまでの生活支援の学習などを活かして、利用者への優しい気持ちをこめて対応した姿を見ることができる。しかし、「体験学習」の事前学習、つまり下見を含めた外出の準備の大切さについては、下見をしっかりと行ったグループだけが感じているにとどまっている。このことは、利用者が実際の障害者ではなく、学生であったという気安さが原因していると思われるが、今後の授業展開を考えるにあたって課題の一つになった(表7)。



写真5 階段は車椅子を持ち上げて移動しなければならない。

表7 介護者体験からの学び

介護者体験からの気づきや学び	内 容
周囲に対しての気遣い・申し訳なさ	<p>周りの気遣いで感謝の気持ちと、時間をかけてしまうので申し訳ない気持ちになった。</p> <p>利用者さんが周りの目を気にしているように感じた。</p> <p>混雑している場所(エレベーター、レストラン、バス、駅、駅周辺)の利用時には人目が気になり、周囲に迷惑をかけて申し訳ないという気分になる。</p>
事前の準備や手配の重要性	<p>下見には、実際に車で行き、時間配分・距離などを測った。トイレ休憩の場所、ちひろ美術館、アートヒルズなどの従業員の方に説明し、許可をいただいた。利用者さんが楽しんでいただくために下見をして、先方に理解してもらうことで、スムーズに入館でき、下見の必要性を感じた。</p> <p>下見をした結果、予定していた食堂では、身障トイレがなく、入口も狭かったので変更せざるを得なかった。下見をしておいてよかった。</p> <p>車への移乗について資料をもらい、利用者負担のかからない介助方法を考えることができた。</p>
事前の手配などから外出の不自由さを実感	<p>普段自分たちが何気なく利用している交通機関でも、車椅子利用者が利用するためには事前に多くの手配と人手が必要であることがわかった。そのことから、外出を断念する人もいるのではないかと。事前の手配が必要なく気軽に利用できるようならなければいけないのではないかと。</p>
利用者の安全・安楽・安心への配慮	<p>クッションのない車いすでは振動がより伝わり、段差などのたびに利用者の身体がずれてしまった。</p> <p>フットレストが低すぎると、スロープが急な場合引っかかり、底を擦ってしまうので外出時は少し高めにした方がよい。</p> <p>車椅子を押す場合、靴や荷物が介助の妨げにならないよう配慮しなければならない。</p> <p>車椅子を押している人からは利用者の足もとは見えにくい。ぶつけてしまって初めて気をつけなければと思った。</p> <p>砂利道は車椅子がゆれて安定しないため、声かけしながらゆっくり介助する必要がある。</p> <p>買い物する際、陳列棚と陳列棚の間が狭く、肘等が当たらないよう保護する声かけをするように注意して移動した。</p> <p>避難経路が確保されていたが、草が生い茂り、車椅子で出るには適していないと感じた。誘導には、職員が案内して避難すると聞いた。</p> <p>店内に入り、お土産を試食した。介護者が利用者の手に置き、それを利用者が食べたが、衛生面からウェットティッシュ等を持っていけば良かった。</p> <p>乗用車の乗降口は車椅子と高さが異なるため、利用者がつらくないように腰部を支えて移乗した。(他に、乗用車の乗り降りに関しては利用者や車に合わせて学生たちは様々な方法を考えて対応した)</p> <p>利用者の状況は、財布の出し入れや小銭での支払いが困難なため、介護者はお金を取り出しやすいよう配慮した。</p> <p>食事の際、自動具を用意していたので、スムーズに食事介助できた。</p> <p>利用者の希望でゲームセンターに行き、千円札を両替機に入れようとした。手は届くが、手先の細かい動きができないため千円札を入れることができず、介護者が代わりに入れた。</p> <p>シデロイホスという楽器をたたく時、たたきやすい高さを選んだ。</p>
利用者の気持ちへの配慮	<p>バスの中では、車椅子用のスペースがあったが、利用者が孤立しないよう、側に立って見守ったり話しかけたりした。</p> <p>排泄に関しては恥ずかしさのため形だけの介助になってしまった。</p> <p>移動だけの援助ではなく、介護者の配慮がとても大切である。</p> <p>食事に関しても、利用者が食べたい物を聞き、希望に沿うことが大切。</p> <p>他のお客様に迷惑がからないようにした。</p> <p>周囲の人に対して、「すみません。」「お待たせしています。」などと、声をかけたとき、利用者は、もっと肩身の狭い思いをしているだろうと心が痛んだ。</p> <p>利用者の前では、疲れたとか、大変だということを言わないように心がけた。</p>

4. 障害者体験からの学び

介護を学んでいる学生にとって、介護される側の疑似体験をすることには大きな意味がある。利用者役の学生は、個々の取り組みに差はあったものの、共通の利用者像を意識して利用者が置かれている状況やその思いを感じ取ろうと努めている。感じ取ったものを7項目のカテゴリーに分類した(表8)。これらの疑似体験から感じ取ったものは、グループ内で共有した。

(1) 身体的な苦痛

歩行することができない利用者にとって、車椅子は移動の際になくてはならないものである。しかし、それはあくまでも一時的に使用する移動のための道具である。長時間座位を支え続けるための椅子ではないので、そこに同じ姿勢でじっと座り続けることによっておこる苦痛が大きいことがわかった。今回屋外を移動してみると意外にタイヤから伝わる振動が大きいことに学生は驚いた。

「体験学習」に利用した車椅子は施設などで多く使用されている標準型の車椅子である。小回りがきくよう前輪(キャスター)の直径が小さくなっている。そのことは、屋内の凹凸が少ない床の上では問題ないのであるが、屋外の路面では、利用者が振動を直に感じ続けることとなり、具合が悪いことがわかった。

介護福祉士の制度ができて間もない頃、寝たきりの状態から起こる弊害を減らそうと、まずは離床して車椅子に移るのが推奨されていた。実習先の施設では、延々と車椅子に座り続ける利用者の姿をよく見かけた。現在はそのようなことは少なくはなっているが、改めて、車椅子は移動のための道具であることを介護者は考えなくてはならない。今回の「体験学習」後、そのことを学生と共有することができた。

また、車椅子の介護技術の習得の大切さや、利用者に配慮した声かけの大切さを学ぶことができた。気候や天候などに合わせて服装や持ち物を準備する必要性も学んでいる。

(2) 精神的な苦痛

障害者役の学生は、身体的な苦痛ばかりでなく、不安や恐怖といった精神的な苦痛も感じた。車椅子を押す速さ、交通量の多い道路の利用等への配慮が必要であることが理解できた。そうしたことから利用者の目線や立場に立って考えることの必要性を感じた。

(3) 安心感が得られる支援の大切さ

障害者の疑似体験から、長時間車椅子に座っていることからくる疲労感や苦痛を軽減するための支援の方法、さらに、利用者が安心を得られる支援の必要

性と工夫の大切さを学んだ。

(4) 支援に対する抵抗感

障害者は、周囲の人の視線を感じ、さまざまな場面で周囲に迷惑をかけていることに申し訳ないという気持ちをもってしまふことがわかった。また、周囲の支援に対する多様な抵抗感をもつことが理解できた。学生同士であるにも関わらず、介助してもらふことに気を使い、介助者の何気ない言葉に対して申し訳なく思ってしまうことがわかり、支援する側は、その思いを理解したうえで、利用者が遠慮しなくてもすむような接し方を心がけるとともに、そのための支援技術を身につけることの必要性が理解できた。

(5) 周囲の人の視線が気になる

車椅子を押してもらっている時に、そのことで周囲の人から声をかけられたり、迷惑だと言われるようなことはなかった。しかし、障害者役の学生は常に周りにどう思われているのだろうということに敏感になっていた。

あるグループでは松本城周辺で、スポーツ用の車椅子を颯爽と乗りこなしている青年を見かけ、思わず「かっこいい」という声があがった。障害者自身も、そうでない人たちも障害の有無など関係なくありのままの姿で自然に過ごせるような社会にしていくなさを感じた。

(6) バリアフリーの不十分さ

障害者の視点でみると、社会のバリアフリー化はまだまだ進んでいない。道路の振動や道幅など、一般的な社会の理解不足を感じた。車椅子を利用している障害者がもっと街にあふれてくれば社会全体が当たり前としてとらえてきて、周りの人の視線も少なくなり、小さな配慮が生まれてくるものと感じた。

(7) 選択の自由のなさ

映画館では障害者用としての座席の指定があったり、障害があることにより自ら選択の幅を縮めてしまうことやあきらめてしまうことにつながると感じた。また、選択の自由も保障されていない。これは、介護者の支援技術力の向上や工夫だけでは補えない現実である。社会に向けて「こうしてみよう」「周りの人に働きかけてみよう」と発信することができ力を養っていく必要がある。

表8 障害者体験からの学び

障害者体験からの気づきや学び	内 容
身体的な苦痛	長時間、車椅子に座ったままだったので、臀部や腰部が痛くなった。
	ずっと車椅子であったため腰と脚が痛く、全身疲れたので他の椅子に座りたいと思った。
	フットレストの高さが合っていないかった（低すぎた）ため、大腿部の裏が痛くなった。
	屋内と比べて、道路や歩道などの走行中には路面からの振動が予想以上に大きかった。
	日差しが強いときに屋外を移動していたため、半ズボンははいていた足が日に焼けてしまった。（7月に体験した2年生）
精神的な苦痛（不安感・恐怖感など）	ひざ掛けを持っていったが、屋外を移動中足もとが冷えて具合悪かった。（10月に体験した専攻科）
	スロープは上る時よりも下る時のほうが怖く感じ、このまま落ちてしまうのではないかと感じた。
	利用者役を行ってみて介護者側はゆっくりと車椅子を押しているつもりだったかもしれないが、目線が低くなる分、スピードが速く感じ、怖かった。
	歩行者や自転車とすれ違う時に、目線の低さから恐怖を感じた。
	車椅子に乗っているときの目線からは、すべてのものが大きく見え、歩道上でも、近くを車が走り抜ける時は怖かった。
安心感が得られる支援の大切さ	バスの中で、車椅子用スペースに固定してもらったが、同行者が後ろの座席に座って話していたため、孤独感を感じた。
	段差が近づいたりすると、思わず身構えてしまった。
	利用者が安心するためにも、介護者による声かけの大切さを学んだ。
	介護する側は、もう少しゆっくり、その人が安心する移動の速度を考えたほうがよい。
	車椅子に乗り続けるのではなく、ソファーに移乗すると疲労や苦痛の軽減になる。
支援に対する抵抗感	バスの中では安全ベルトと固定により、安定していた。
	利用者の場合は危険が生じたときに自分では対処できないので、利用者への配慮と危険予防を常に考えていくことが必要だと感じた。
	スプーン・フォークを持ち込んで食べやすくなった。コップにもストローを使う等の工夫がほしい。
	利用者は、多くのことをお願いして介助してもらっているのに、お願いすることをためらってしまう。
	絶えず他者に援助をお願いして生活する人は、介助者に忙しそうな様子や負担をあまりかけたくないという思いから、してほしいことやお願いしたいことがあっても、言えないでいる場合が多いのではないかな。
周囲の人の視線が気になる	周りの気遣いで感謝の気持ちと、時間をかけてしまうので申し訳ない気持ちになった。
	1人でアイスを買おうとしたとき、店員に手間をとらせてしまい、申し訳ないと思った。
	混雑している場所（エレベーター、レストラン、バス、駅、駅周辺など）の利用時には人目が気になり、周囲に迷惑をかけて申し訳ないという気分になる。
	長時間、1人の人に車椅子を押してもらうのは、介護者に申し訳ないと思った。
	介助が大変そうだったり、介助者が「疲れた」というのを聞くと申し訳ない。
バリアフリーの不十分さ	学生同士なのに、介助してもらうことがこれほど気を使うことだと思ってもみなかった。
	松本駅や駅周辺では、特に若い人の目が気になった。
	混雑している場所（エレベーター、レストラン、バス、駅、駅周辺など）の利用時には人目が気になり、周囲に迷惑をかけて申し訳ないという気分になる。
	バス乗車時にかなりの時間を要したため、他の乗客は声には出さなかったが、迷惑そうな顔をしていると感じた。
	平坦と思われた道路でも車椅子に乗っていると、自分が思っている以上に揺れを感じた。
選択の自由がない	普段、私たちが何気なく、当たり前のように通る道でも、車椅子だとうまく通ることができないこともあると実感した。
	バリアフリーというけれども、むしろバリアフリーの配慮ができていないところのほうが多いのではないだろうか。
	障害のある人が生き生きと生活できる状態ではない。バリアフリーの部分があっても、近くにそれを妨げる物が置いてあったりした。
	障害のある人が当たり前の生活をするには、やや距離があるような気がした。
	すべての人が住みやすい環境には、バリアフリーが当たり前に取り入れられた社会が必要だ。
選択の自由がない	障害のある人に配慮された施設がそうでないかが明確に判別できた。設計者の視点で考えるのではなく、障害のある利用者の視点で考えることが必要だと思った。
	映画館では、車いすの方は座席の選択の自由がなく、辛い状況を強いられると感じた。
	外出して好きなしゃぶしゃぶを食べ放題して満足した。しかし、好きな物を自由に食べたという経験によって、仮に実際の利用者で施設に戻った場合、今度は施設生活に不満を持ってしまうこともあるのではないだろうか。
	利き手麻痺ということで、パスタを食べたかったが選ぶことができなかった。
	ラーメンを食べたかったが、手先の細かい動きができないので、違うものを選んだ。
選択の自由がない	松本城の天守閣に上ってみたかったが、あきらめざるを得なかった。

5. 教員のふり回り

2年生の体験学習が終了してから、各グループに同行した教員がそのグループの様子などをふり返ったものを次にまとめた（表9）。今回は初めての導入であったため実施時期の検討や他の教員の授業参加に支障が出てしまい、十分な教員間・学生間の打ち合わせをもつことができなかった。しかし実際に行ってみると、地域社会の障害者に対する配慮について教員も学ぶきっかけになった。

表9 教員の振り返り

教員の気づき	内 容
体験学習の日程について	長期の実習をはさんでの授業展開となったため、準備段階からのつながりが不十分だった。学生の体験学習へのモチベーションが下がってしまった。気持ちの上でのデメリットが多かった。
	夏場で、かなり気温が高く、日差しも強かったため、春か秋の実施が良いか。
	交通機関との連絡調整を学生が行った方がよいと、グループの実施日程をずらした方がよい。
	1日ばかり（1～4限）でなくてもよい。昼食後帰校し、まとめるにあてればよい。
	早めに帰ってきたグループが、まとめるのをどのようにしたら良いのかわかっていなかったため、時間が有効に使えなかった。
グループごとの目的地について	中信地区限定（松本市とその周辺）がよい。下見もしやすい。
	外出の目的を明確にする。利用者役の人になりきって、中心になって計画するのも良い。
	担当したグループは、障害者の日常（買い物・娯楽）ということで、普段の生活でもあり得るものを想定されていた。アイシティへの外出は適当であったと思う。
	あまり遠方へ行くより、近くでいろいろな交通機関や場所に行ってもよい。あまり遠いと乗車時間が長くなるだけのような気がする。
	学生が相談して決めたのであれば、基本的にその目的を尊重したい。ただし、行って帰って来られる実現性が伴う必要がある。
対象とする利用者像について	利用者像は共通でなくてもよい。リクライニング式車椅子利用もあってよいのでは。
	利用者になりきるような工夫が必要。前もって利用者になりきって学内で演習するなどして、イメージを膨らませて援助を考えることが必要。また、膝の拘縮として服の下でさしを巻いてみるなどすると障害の理解ができるのではない。
	あまり複雑な設定ではなかったので学生には分かりやすかったと思う。忘れそうな時に周囲にたしなめられて、すぐに利用者の状態に戻ることができた。
	物理的障壁を感じてもらうためには車椅子利用者設定でよかったと思う。情報面の障壁について深く考えるためには、視覚障害や聴覚障害体験も有効かもしれない。
	学生にとって、利用者像をイメージすることが難しかった。また、その利用者の外出の目的をはっきりさせることで、支援内容が濃くなっていくのではない。
学生の自覚について（授業であること、社会的なモラルなど）	演習目的を明確にし、少人数グループとして行ったらどうか。人数が多いと他人任せになってしまう学生がいる。
	車椅子利用者の外出支援の留意点についての学習は、当日までに日が開きすぎたせいか、あまり活かされていなかったのが残念。机上の学習だけであったので、シミュレーションが必要だった。
	実施当日は協力し合いトイレ・移動の場面などでしっかりやっていた。
	役に徹することの意味が不明であった。介護者・利用者は良いが、写真・記録者は状況が変化しても、何もしないことが徹することなのか。
	サービスを受けるのが当たり前、という態度だった（バスの昇降のとき、店のドアを開けると、レストランで席に着くとき等）。
	目的地や気候、利用者の状態に合わせた持ち物や服装の準備が不十分だった。
	周囲の人（お年寄り、子供、同じエレベーターへ乗車した人など）への気配りがあった。
	意外とスクリーンは見えにくいものだったが「勉強だから」と首の痛み、目の疲れを訴えながらも障害者席で観た。
	利用者役の学生の、障害に対する理解が不足していた。
	担当したグループは下見に行って目的地の施設の事務と打ち合わせもなされていて準備ができていた。ただ、グループメンバーの中には事前準備の参加が消極的な学生もいた。
外出後のまとめについて	同行したグループは、公共交通機関を利用しなかったため、外部の人に接する場面が少なかった。車の乗り降りの介助はきちんとできていた。
	当日も大切だが「事前準備の大切さ」について学生が自覚することが一番大切だと思う。現場に就職しても、事前の下見・準備が大切で、その結果が当日あらわれるのだと思う。
	帰ってきた時のまとまりがある状態で作ることができたら、記憶も感覚も鮮明なところでもっと利用者、介護者の気持ちに近いものが作れたと思う。
	一人ひとりになんらかのまとめシートが必要に思う。各自役割や全体の考察等まとめておいて、次の授業に臨む方が、まとめに参加できるのではない。
	とりかかりが遅かった。
今後の授業の展開について	パワーポイントを使う点は良かったと思う。
	今回は外出支援の計画に時間をかけすぎたか。グループ担当教員が当初から入り、グループ内の交流がうまくいけば効率化が図れたのではない。
	当日行き先を変更していたグループがあった。それに関しては、「今までの準備は何だったのか」「それなら自分たちも計画など立てずに当日の思いつきで出かけたい」と言う声が他のグループから出た。
	当日の外出だけでなく、それまでのプロセスも大切だったと思う。そのグループの学生が今回の授業で何を考え、学び得たのか多少の不安がある。
	初めての試みで、これからの工夫点はあるが、学生が主体的に取り組める内容であると思う。来年は「移動の生活支援Ⅰ」からの演習内容が加わるので、時間配分も必要かと思う。しかし、今回のように事前準備、実施のまとめ、発表は必要かと思う。
その他	初めての外出支援体験学習は、介護福祉学科としての新しい一歩だったと思う。一つの科目で担うのは大変だったと思う。
	当日外出先を変更したグループがあったが、事前準備が意味のないものになってしまった。
	自家用車利用も良いが、何かあった時の責任がとれない。全グループが公共交通機関を使って行ける範囲を設定するという点でも良い。 （松本市・塩尻市周辺）
	タクシーの予約については、学生に予約の段階から行ってもらっても良かった。学生が予約すれば、どこに来ていただくか打合わせ、考える機会になった。
	授業担当をしてみて、学科として今回が初めての試みであったことを考えても、もっと科目間、教員間の連携をとりながら、準備段階から進められるとよかった。

Ⅵ. 考察及び今後の課題

1. 体験学習の教育的効果

介護福祉士養成教育においてはさまざまな場面で演習が行われているが、今回の「体験学習」は学外での障害者擬似体験と介助演習であった。実際に公共交通機関を利用して地域社会にでてみると、以下の4点についての教育的効果が認められた。

- ①障害者の心理面や生活の不便さや制限を感じることができ、支援にあたっては障害者の目線でとらえることができる。
- ②自己の介助方法や技術の未熟さを痛感し、さらに技術の向上に努める必要性を自覚する。
- ③車椅子利用者への様々な配慮やサービスの理解を深めることができる。
- ④障害者が社会「参加」することへのさまざまな障壁を理解することができる。

今回の「体験学習」の第一の目的は、学生が、障害者役になりきって、またはその介護者役として実際に地域社会に出ることから、気づきや発見を得ることである。このことについては、Ⅴ「体験学習」からの学びの各表から学生の声をひろってみると、ある程度達成できたと評価することができる。「普段、何気なく歩いていた松本駅周辺の歩道だったが、車椅子に乗って通ってみると、障害物が多く傾斜もついているためまっすぐに進むことが困難であった。」「路面のわずかな凹凸が大きな振動となり車椅子の乗り心地が悪くなった。」「車椅子を押してもらって移動することは、歩かなくてすむので楽なことだと思っていたが、実際には身体的にも精神的にも多くの苦痛があることがわかった。」また、「通学で毎日のように利用しているJRだったが、車椅子で利用するためには事前に多くの手配や人手が必要であることがわかった。」さらに、介護を学ぶ学生が、「利用者の立場で地域に出てみることは、こんなにも不安で不自由なものであった。」「介助してもらうことがこれほど気を使うことだとは思ってもみなかった。」と、言っている。このように、学生は学内では得ることができない事柄を、おぼろげにしか予測できない事柄を、地域社会に出てみた体験によって確かな形で学習することができたのである。また、「いかに安全に介助するか」「設備や制度を知り、利用・活用できるか」ということの実際の学びも大きかった。しかし、それだけにとどまらず、「街や建造物、サービスや制度をどのように改善すべきか」「社会の一員としてどうすれば改善できるのか」まで考察できる学習に広がっていくことができるものである。「移動の生活支援Ⅱ」の科目の中だけではその学習を広げ、深めていくことは難しい。関連する科目との連携をどうとっていくかが今後の課題で

もある。

体験学習は、教育方法のひとつである。体験すること自体が目的となってしまうと、「意図的な経験による能力の向上」だけに着目してしまう危険性がある。体験学習のもっとも重要な要素である「気づき」と「ふり回り（省察的考察）」と「体験」が組み合わさってこそ「人間の尊厳を基盤とするノーマライゼーション」について学ぶことができる。今回の「体験学習」では、「気づき」と「ふり回り」を深めるために、ふり回りを実施したことは評価できる。しかし、専攻科において、まとめの段階で、わからない課題が自発的にできて学習したように、発展的な学習ができるよう、教員の指導や必要に応じては外部講師の指導を充実していくことが重要となるであろう。

2. 科目間連携の整理の必要性

「移動の生活支援Ⅱ」という2年次になってからの科目の中で実施したが、今回のような体験学習を、今後定着させていくためには科目間の連携が必要になってくる。たとえば、バリアフリーについての理解をどこの科目でいつ行うのかを明確にしておかなければならない。

また、共通する利用者像の設定に当たり、1年次において学ぶ食事・排泄・移動・身だしなみ等の生活支援技術との関係を明確にしておく効果的な外出支援につながると考える。それぞれの科目間で利用者設定を同一なものにして授業展開をしていけば、疾病の理解を事前に行うことができ利用者像をイメージしやすくなる。他に考えられることとして、「介護過程展開論Ⅰ」の運動機能障害の事例と同一にしていけば、なぜ外出支援を行うのかという根拠が明確になり、外出計画の目的が明確になるということが出てくる。利用者設定については今後の検討課題となる。このように、利用者設定ひとつをとっても科目間連携が重要になる。ましてや、「体験学習」の振り返りで学んだことを掘り下げ、深めていくためには、科目の枠を取り払った連携を考えていかなければならない。

さらに、障害者福祉についての理解は「障害の理解Ⅱ」「社会保障論Ⅱ」で学ぶため、これらの科目との連携も必要になる。いつの時期にどのような内容が入ってくるのかを明確にしておくことも必要である。

専攻科においては、「介護自立支援論」との連携を持つことができ、そこで行われている障害の当事者による特別講義を事前に組むことができた。また、報告発表時においても参加してアドバイスをいただくことができた。専攻科だけでなく、2年生におい

てもこのような連携を図ることができれば、学生の理解をより深めることができる。

限られた時間割の中で科目間連携を図っていくことは至難の業であろうが、このことを機会にして密接な教員間の連携を図っていきたいと考えている。そして、複数の教員が授業にかかわり、共通理解ができるように時間割を組立てていくことも重要なことになる。今回の「体験学習」を通して科目間連携の重要性の共通の理解が得られた。

3. 授業展開の課題

体験学習を担当した教員の振り返りをもとに、来年度の授業展開の課題を次の3点に絞って考察する。

1) 体験学習の日程について

「移動の生活支援Ⅱ」の科目については、今年度は2年生の前期に組み込まれていたが、来年度は、気候や介護実習の時期を考えて、後期に組み込むようになる。後期に行うことにより、介護実習で授業内容が中断されることなく実施できる。また、科目間の連携調整がとりやすくなる。

外出先については、松本市内もしくはその周辺に限定しても同様な学びができるため、1日ばかりではなく3コマを使い、昼食後は早めに帰校し、その日のうちに各自振り返りの時間を設けるようにすると授業時間を有効に使うことができる。

2) グループ学習について

今回の体験学習では、「グループの協働学習」を大切にしたいと考えていた。しかし、協働学習の展開方法を十分に検討しないまま授業に入ってしまったため、2年生においては、「グループの人数が多かったため、他人任せになってしまう学生がいた」ということがわかった。このことは、グループによっては、「体験学習」当日ばかりでなく、事前学習や事後学習においても同じ傾向だった。一方、専攻科の場合は利用者役1名に対して介護者役1名という小単位での学習形態をとったので、どの学生も通して真剣に学習に参加することができた。

グループ活動について、秋田は「グループ活動は、生徒間での理解をより深めるだけではなく、自分の考えを作り出す、学習参加意識を高める、人間関係を築くといった意味を教師たちは見出してきている。」¹⁾と述べている。また、「協働学習をデザインする時の教師の役割を17項目あげており、それらをステップとして表わし、実際にはステップは順次直線的に進むのではなく、生徒の状況をみて判断し往還的に進行することとなる。」²⁾と述べている。教員間で事前にグループ学習の教員の役割の共通理解をしておくことでさらに学生の学習が深まると考

える。今回は授業の関係で他の教員が複数で入ることが難しい状況であったため、次年度においては時間割の段階で調整を図り、グループが協働して、グループ活動として有効に機能していくような授業展開を行い、主体的な学習で学んだことを社会に発信できるような教育効果につなげたい。

3) 対象とする利用者像の検討

今回、学生にとって、利用者像をイメージすることが難しかった。また、その利用者の外出の目的がはっきりしなかった。そのために、「体験学習」の目的の達成度が低いグループがあった。そこで、対象とする利用者像を明確にする必要がある。学生が障害をイメージしやすいものであり、外出を計画し実施するにあたってのストーリー性をもたせることが必要である。外出の目的を明確にするためには介護過程展開の関連からみていくとよいと考える。科目間連携の中での検討課題としても取り上げているが、考えられる事例としては、来年度の2年生が一年次に学習した「介護過程展開論Ⅰ」で展開した事例を共通の利用者像として学習してみたいと考えている。

また、事前学習の中においても、移乗・移動・食事・排泄の生活支援についての学習を復習しながら「体験学習」の実施につなげていけば利用者像が明確になると考える。

Ⅶ. おわりに

介護福祉学科として、車椅子で交通機関を利用した「体験学習」を行うのは、初めての試みであった。2年生の場合、総勢61名の学生が動くにはどうすればよいのか、果たして、学生が何事もなく帰校することができるのか、学びや気づきを持ち帰ることができるのかなど、不安は尽きなかった。しかし、学科全体の理解が得られ、「とにかくやってみよう」と、出発することができた。

介護福祉学科は、教員全員の協力を得られるのが強みである。今後も、教員間の連携と共通理解をもって、より学生の学習を深められるようにしていきたい。

最後に、「体験学習」当日はもとより、その前後の期間も含めて、関係交通機関や各施設、アドバイスをいただいた車椅子利用者の方や介護ショップの方たちのご理解、ご協力により、事故もなく無事学習を終了することができました。また、学校側の理解と協力にも併せて感謝申し上げます。

<注>

松本バスターミナルは、平成23年12月28日に

改修工事を終え、リニューアルオープンした。地下にあった乗車券売り場を1階に移し、階段を上り下りすることなくバス乗り場へ行けるようにした。

－省略－ 通路は車いすも通れる幅を確保し、段差もなくした。－省略－ 乗り場は、車椅子に配慮し、段差にはスロープをつけ、横断帯も新設した。

(タウン情報 2011 年 12 月 29 日)

このように、身近な地域の中で、「体験学習」中に不便だと感じた部分が改修されたことは喜ばしいことである。

引用文献

1) 2) 秋田喜代美 「授業研究と談話分析」 在
団法人放送大学教育振興会 2006 p 137,146

参考文献

伊藤和子 「介護福祉教育における疑似体験の意義と方法」 愛知江南短期大学紀要
31 2002 p 47 ~ 64

尻無浜博幸 「アクセシブル・ツーリズムガイド
ブック in 台北」 松本大学出版会
2011

新崎国広 「学校教育における福祉教育・ボランティア学習実践の課題と展望」
日本福祉教育・ボランティア学習学会
研究紀要 Vol.18 2011